

古墳時代の終りも、
島根の古墳なくしては語れない
…後期古墳が語り始めた…

古墳時代も終りが近づくと、島根県でも前方後円墳や前方後方墳は時代の役割を終えたかのごとく姿を消し、それ以外の小さな古墳があらゆる場所に多数築かれます。また大きな墳丘を築くことよりも、内部の施設に力がそそがれるようになります。

「これらは」「横穴式石室」「や」「横穴墓」といって、まったく

く新しい葬法が始まった直後に起きた現象で、このころ大きな社会的変化があったと考えられています(三巻を参照)。(この変化への対応は、各地域(現在の郡や町づくりの範囲)により異なっています。

これらは『出雲国風土記』など、次の奈良時代以降に書かれた文献と照らし合わせることで、より鮮明になっていきます(五巻を参照)。(こうした古墳研究は、風土記が全国で唯一、完全な形で残る出雲でしかできないものとして期待がかけられています。



林43号墳(玉湯町林村 上下とも)
全長17mの小さな前方後円墳だが、内部には小さな石積みの部屋があり、入口は横に付いていた。九州地方から導入されたと考えられる、初期の横穴式石室。主人とその家族に送られた品々、食器の土器が目立つ。現在、道路脇に移築公開されている。



日脚4号墳(浜田市日脚町)
石室は後世の破壊を受け、床に近い部分だけ残されていた。土器や鉄剣が見える。床面の大きな石は、木棺をのせる台と推定される。

県内各地の横穴式石室

前・中期の古墳では、縦に掘った穴の中に遺体を埋葬する室(横穴式石室)を造って棺を入れますが、後期古墳では、横に入口の付いた部屋を持つようになり、この部屋には、石を積んで造る「横穴式石室」と、山の斜面を直接掘り込んで造る「横穴墓」があります。両者はまったく別のものに見えますが、構造的には同じで、また同じ地域では形も共通した点が多いことがわかってきました。



伊ガラビ古墳群(松江市大井町)
丘のすそまわりに、石が並べられていた。床にも板石を敷いている。現在は工業団地。

ここで紹介する横穴式石室は、ほとんどが小さな石を積んで造った小型のものですが、大きさ、形、石材などにさまざまな違いが見られ、そこに重要な秘密が隠されていると思われ(三巻を参照)。



岡田薬師古墳(松江市法吉町)
小型の横穴式石室を持つ古墳。石室と墳丘の造り方がよくわかった。玉や子持ち壺などの須恵器が出土。現在は住宅団地。



池ノ奥2号墳(松江市大井町)
天井石は残ってあらず、床面は板石と土器のかけらが敷かれていた。このあたりは古墳時代から平安時代にかけて、須恵器の一大生産地である。そのため石室が集中しており、伊ガラビ古墳群とともに土器作り集団の墓と考えられる。現在は工業団地。



かど門遺跡(頓原町志津見)
2基の横穴式石室が見つかった。山間部特有の玄門(死者を葬る部屋への入口)のないタイプで、7世紀の新しい古墳。志津見ダム予定地内にある。



ごりよ郡屋敷古墳(仁多町三成)
古くから開口しており、遺物はほとんど残っていない。現在は三成小学校に移転され、見ることができる。



ごうがみ郷上古墳(大和村都賀行)
長さ6.5mの細長い横穴式石室で無袖式と呼ばれる中国地方山間部に多い形だ。須恵器・土師器・矢じり・刀などの多くの副葬品が出た。



やかち屋形1号墳(松江市乃木福富町)
石と木を組み合わせて室を造る、「木芯粘土室」という珍しい横穴式の墓室が見つかった。松江道路建設に伴う調査で見つかった。

発掘しぼれ話
…ふるい…

工事中に偶然、小さいながらも残りのよい横穴式石室が発見されました。まわりで工事をしてるので、急いで調査が進められました。

暗い石室の中にあつた土を取り除き、須恵器などの副葬品が出始めたある日のこと。見学に来ていた近所のおじさんが、調査員に近づいて来て言いました。「これは何かねー」指でつままれた小さいものを目を「らして見ると、緑色に輝く直径数ミリのガラスの小玉でした。

「その捨ててある泥の中にあつたでね、おじさんが言うやいなや、調査員は捨てた土をかき分け始めました。すると出るわ出るわ。あわててそれまで掘った土を、全部ふるいにかけたところ、なんと数十個の小玉が出てきたそうです。暗くて狭い石室や横穴の中の調査では、こうした小さい遺物を見落とすことは、実はけっこうあります。ふるいをかけてはじめて、鉄器や人骨、歯などが出たこともあるのです。

